

日常会話における自己語りのプロセス：雑談の会話 テキストの分析から

服部, 文香
九州大学大学院人間環境学研究院

佐々木, 玲仁
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/1685872>

出版情報：九州大学心理学研究. 17, pp.35-44, 2016-03-01. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

日常会話における自己語りのプロセス —— 雑談の会話テキストの分析から ——

服部 文香 九州大学大学院人間環境学研究院
佐々木玲仁 九州大学大学院人間環境学研究院

The process of self-narrative in the daily conversation-Through the analysis of corpora of the daily conversation

Ayaka Hattori (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Reiji Sasaki (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

The purposes of this study are to investigate the process of self-narrative and to consider the method of analyzing self-narratives. Using corpora of subjects' conversations, We analyzed the process of self-narrative from the perspectives of content and form. Content was divided into the following three types: factual information, narrative self-reference, and response. We focused on the narrative self-reference type, which includes, for example, talking about one's own ideas or actions. The results indicated that the speaker shared a more personal story when the listener observed without commenting. Further, the speaker felt more comfortable discussing her/his own idea when she or he talked about a specific event in time rather than personal circumstances.

Key Words: The process of self-narrative, the daily conversation, the analysis of corpora

I. 問題と目的

1. 臨床心理面接において自己を語ること

カウンセリングは心理的な問題を解決するにあたり、有効な手段であると考えられ、近年医療・教育・福祉など様々な領域で取り入れられている。その中で、臨床心理学の中でも様々な技法が生まれ、実践されるなど新しい試みも行われるようになってきている。また、臨床心理学の学問の広がりや臨床心理士へ求められる役割の変化に伴い、臨床心理士の「専門性」とは何かという問いが重要になってくると考えられる。しかし、桑原(2010)が「カウンセリングあるいは心理療法が何をすることで、何が起きているのか」という問いへの答えは自明のものではない」としており、実際にカウンセリングでは何が行われているのかということや、セラピストがどのようなプロセスで心理的な問題の解決を求めて来談したクライアントに対して、心理的な援助を行っていくのかは未だに明らかになっていない部分が多くみられる。これまで臨床心理学の分野では実際にカウンセリングを行った事例に関して、セラピストが考察を加えた事例研究やカウンセリングの実践から、様々な症状や心理的な課題について理論化されている研究がこれまで多く行われている。しかし、それらの研究はカウンセリングの経過をセラピストが解釈をし、考察を加えたものがほとんどであり実際にカウンセリングのプロセスを詳細に論じている実証的な研究は日本では少ない。これまで欧米では、実際のカウンセリングの録音記録や逐語記録などを

用いてカウンセリングのプロセスについて分析を行っている研究はみうけられるが、日本では依然そのような研究が少ない(加藤, 2009)という指摘もなされている。一方で文化差や言語の違いにより、日本における心理療法の研究も進めていく必要があると考えられる。

まず、カウンセリングにおいてクライアントとセラピストがどのようなプロセスで心理的な作業を行っていくのかを明らかにした研究の先駆けとして、「非指示的カウンセリング」を創始し、心理療法におけるセラピストの作業の考え方に大きな影響を与えたカール・ロジャーズはカウンセリングを録音し、逐語化し出版している(Rogers, C, 2007)。これをもとに河崎・池見(2010)はReflectionという応答の観点からロジャーズの逐語記録について研究を行っている。この研究ではロジャーズのReflectionという心理療法の応答の様相について実際の逐語記録をもとに考察を行っている。次に、加藤(2009)は言語学の立場から、サリヴァンの未公開の逐語記録を、「選択体系機能言語学(SFL)」に基づいて分析を行った。この研究ではセラピーで、双方の語彙-文法資源がどのように使用され、そのような語彙-文法資源の使用がセラピーの中でどのような働きがあるのかを考察している。その一例として、セラピーの中で行われている「問題の同定」では、クライアントの生活史の中から問題とされるものを集め、その物事の属性や意味などを関係させる「関係過程節」を用いて、クライアントの行動と問題とを関連づけている。セラピストは「関係過程節」を用いて、クライアントの行動とその背景にある問題を

関連づけ、クライアントと自分自身の問題と行動が関連しているということと共有するという作業を行っていると考えられる。さらにクライアントの行動を実際にした行動から「もの」化(名詞化)することで問題の抽象化・一般化を行うとしている。このように、加藤(2009)では心理面接の中でどのような文法の構造が使用され、セラピストがどのような作業を行っているのかを類型化している。その上で、この文法構造をセラピストによる言語使用を考察する上での1つの判定基準として心理面接に適用し、語彙-文法資源の使用の違いを観察することで、治療アプローチの違いやセラピストの個性を査定する手がかりとなると述べている。

この加藤(2009)の研究は言語学の観点から言語行動の類型や、語彙、文法上の特徴などに関して精緻に定量的な分析を行っている。一方で、問題点が2点考えられる。1点目は、対象としているデータが統合失調症患者との面接に限定されていることである。統合失調症の患者へのカウンセリングについてはその疾病の特徴上、症状を悪化させることも考えられるため、現在では、内省を深めたり、自由な構造での心理療法は行わず、行動療法的なアプローチやSST(社会技能訓練)などより具体的な課題を行うことも多い。そのため、統合失調症患者へのカウンセリングは、自由にクライアントの思いを語る心理療法とは様相が変わってくる可能性も考えられる。2点目の問題点として、英語圏でのカウンセリングであることが考えられる。日本語文化圏ではない地域のカウンセリングである点について、鳥越(2014)は「どのような表現やアプローチが有効かは言語の特性、文化の特性に依拠すると思われる」と述べている。文化や言語の違いにより、日本のカウンセリングにおける表現が欧米の研究でみられている結果とは異なる可能性が考えられる。そのため、日本語文化圏におけるカウンセリング場面のプロセスを明らかにするためには、日本語文化圏におけるカウンセリングを対象として研究を積み重ねていく必要がある。

また、日本においても事例研究をはじめとして、カウンセリングの内容を扱ったものは多くみられる。事例研究は臨床心理学の実践を行う者にとって有用な知見を与えうるものであり、齊藤(2013)によって改めて事例研究の重要性や科学的な意義が提起されている。一方で事例研究は臨床心理学の研究において非常に重要な役割を担ってきているものの、事例それぞれの個別性が高いことや、カウンセリング自体のプロセス以外のそれぞれの事例のテーマについての考察が重視されているため、実際にどのようなプロセスでセラピストとクライアントがやりとりをしているかの全体の流れをみていくことが難しい。また、定量的な分析ではなく、カウンセリングの経過を臨床家の解釈によりまとめているものや、特徴的

な部分のみを抜き出して考察しているものが多い(山本, 2007; 山下, 2009)。事例研究という従来からとられてきた方法とは別に、実際のカウンセリングがどのようなプロセスで行われているのか、またその独自性を実証的に明らかにしたものは少ない。

その数少ない研究の中で長岡ら(2011)は初回面接のロールプレイの映像を収録し、クライアントとカウンセラーの身体動作の同調性、クライアントの長い沈黙に関して定量的な分析を行っている。その結果、クライアントとカウンセラーの身体動作が同調する時は2者がともにクライアントの感情に注意が向けられている重要な局面であることや、双方の身体動作の同調性が高くなる時にクライアントの沈黙が多くなり、その沈黙の間にクライアントは自分の内面に注意を向けるようになったという報告がなされている。

また、長岡・吉川(2012)もカウンセラーと教師との相談場面での違いについて定量的に分析を行っており、カウンセリング対話では話し手である相談者に与えられる時間が非常に長く、日常的な対話とは異なるやりとりであることが明らかとなっている。このように、定量的な分析による実証研究も進みつつある。しかし桑原(2010)の指摘のように、一つの研究で知ることができることはわずかなことであり、今後も様々な観点から研究を行う必要があり、研究の積み重ねが必要であると言える。

2. 自己を語ることについて

臨床心理面接でどのようなプロセスでクライアントが語る作業が行われているかということとを明らかにするために、カウンセリングにおいてクライアントが多くの時間を費やす「自分自身について語る」ことに注目する。

カウンセリングでは自分自身について語ることが多いと考えられる。臨床心理学では「ナラティブ・セラピー」などの技法にも見られるようにクライアント自身の語りを中心に置き、研究や実践が積み重ねられてきている。また、臨床心理学の分野以外でも様々な心理学の分野で“自己語り”の研究が行われている。その中でBruner(1999)は「ひとが自らについて語ることが、平素の生活の通常性に生じた例外的な逸脱性を理解可能な形にし、再び通常性を取り戻す機能をもつ」と提起している。また、野村(2008)も「人は自らについて語るという行為によって、経験を組織化し、また人生の意味を生成し、私とは何ものであるのかというアイデンティティを構築する」と述べている。さらに、榎本(2008)は自己物語の研究の中で「経験はそのままでは何の意味ももたないが、属する文化のもつ意味づけの仕方によって意味づけがなされ、因果の流れや目的論的な流れに沿って個々の経験を並べていくことによって、物語的な意味の流れを

もつものとなる」と考え、自己を語る主要な機能をあげている。先行研究では総じて、自己を語ることについては人が生きていく上で重要な機能があると言われている。このように自己語りについての研究は行われてはいるものの、以上にあげた研究は「自己を語る」という事象全般に対して言及している研究が多く、カウンセリング場面でどのようにクライアントが「自己を語る」のかということについて議論はなされていない。先行研究で言われているような「自己語り」が日常場面でも行われているとしたら、カウンセリングで行われる自己語りの独自性とはどのようなものなのだろうか。その独自性を明らかにしていくためにも、カウンセリング場面での「自己語り」とそれ以外の場面での「自己語り」の両方を対象にし、比較していく必要がある。本研究ではそのうちの一つである日常会話を対象としそのプロセスを明らかにしていくこととする。カウンセリング対話を研究していくための基礎研究として、本研究では成人の友人同士の雑談のデータを対象とする。このデータは、2人一組の言語的なやりとりを主とした関わりであるという構造はカウンセリング対話と類似している。その一方で既知の関係であり、語り手、聞き手が明確に分かれておらず、話すテーマなどが設定されていないという点でカウンセリング対話と異なっている。言語的なやりとりではあるものの、カウンセリング対話とは全く別のモードでの対話であると考えられ、これを比較対象とすることでよりカウンセリング対話の特異性が明らかになりやすいのではないかと考えられる。

先にあげた自己語りについての先行研究（榎本, 2008; 野村, 2008）では、人が語ることにしてどのようなことが「自己語り」になり得て、「自己語り」とはどの範囲をさすのかについての明確な定義は行われていない。それに加え、カウンセリング場面の語りでは直接的・明示的に自身の経験や考えについて言及しない語りについてもその内容をクライアントが考えていること、感じていることなどが表現されている可能性があると考えることが多い。そのため、セラピストは、明示的に自身について語っていないことも含むすべての語りに注目していると言える。また、「自己語り」として区切る際に日本語としての特性上主語が表れにくく（久野, 1978）、明確にどこまでが「自己語り」なのかを区切ることが容易ではない。そこで本研究は、明示的に「私は」とは語られていないものも含む全ての語りを操作的に「自己語り」の一形態として扱う。

3. 方法論上の問題点

先に述べたように「自己語り」の研究は様々な分野で行われてきているが、これらの研究にはいくつかの問題点も指摘されている。遠藤（2002）はこれまでの自己語

りの研究について、「調査インタビューという状況は、通常、パーソナルな自己語りやライフストーリーが発話される場としては、きわめて異質なものである可能性が高い」と指摘し、これまでの自己語り研究がどのような相手に語っているか、またどのような場面で行われているのかが考慮されることなく研究が行われてきたことを問題点として挙げている。つまり、これまでの「自己語り」研究では、自己語りには様々な効果があると結論づけているものの、その語りがどのような場面で起こっているのかや、語り手である聞き手が存在することの効果も考慮されることなく効果について論じられてきたのである。そのため、より精度の高い研究を行うためには、会話がどのような場面であるのか、語り手、聞き手の関係性も含めて、語りデータを分析していく必要がある。

また、これまでの臨床心理学における先行研究はデータに基づく実証的な研究が少なく、事例研究を主として行われている。また、事例研究以外の「語り」を扱った実証的研究においてもその「語り」の研究方法が曖昧なものが多く見受けられる。これまで臨床心理学の分野で多く行われてきた事例研究も非常に重要な研究ではあるが、それらの研究に加え実証的な研究も行っていく必要がある。また、これまでの自己語りの研究では、語りデータの分析方法として、内容面から重要であると思われる一部を切り取り、その部分に考察を加えたものが多い（山口, 2002; 松本, 2009）。一方で、野村（2005）は何“what”を語っているかではなくいかに“how”語っているかという視点も重要であると述べ、ナラティブ分析の方法論の検討を行っている。

このように語り研究でも様々な研究方法があるものの、未だ確固とした方法論が確立されず試行錯誤されている状態である。本研究では一部分を内容面から切り取るのではなく、まずは全体のプロセスを分析することが可能な方法論を検討し、その方法を用いて、対話データを分析することを目的とし、研究を行う。

II. 目 的

以上をふまえて、本研究の目的は、2者の日常会話における“自己語り”がどのようなプロセスで行われるかの仮説を生成することとする。その中で、対話データを分析する際に適する分類方法についても検討を行う。

III. 方 法

1. 研究対象：2者の日常会話のデータを対象とした（李, 2000）。本研究で用いるのはコーパスデータ¹⁾であ

¹⁾ コーパスデータとは言語学などの自然言語処理の研究を行う分野で自然言語の文章を構造化し大規模に集積したものである。

Table 1
会話参加者の詳細

| 資料番号 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|------|--------------------------|--------------------------|-------------------------|-------------------------|---------------------------|
| 参加者 | 女・35歳・大学院生 女・26歳・大学院生 | 女・24歳・大学院生 女・24歳・大学院生 | 女・26歳・大学院生 女・34歳・会社員 | 女・26歳・大学院生 女・25歳・会社員 | 女・24歳・大学院生 女・24歳・小学校教師 |
| 場所 | 大学院生の研究室 | 大学院生の研究室 | 公園 | 話者の自宅 | 話者の自宅 |
| 時間 | 31分 | 43分 | 45分 | 45分 | 35分 |

る。対象のデータは李（2000）の研究において収集されたデータであり、被験者にICレコーダーを手渡し、「会話の分析に用いるデータを収集しているため、親しい友人と雑談するチャンスがあれば、その雑談を録音してください」と教示されていた（李，2000）。また、雑談の明確な定義は被験者には伝えられていなかったが、前述した教示に加え、2人一組の親しい間柄での同性同士の会話であること、普段話しているように自由に話すこと、などの指示が与えられていた。本研究の対象のデータは会話1～5であり、全部で199分の日常会話を分析対象とした。詳細はTable 1に示す。

2. 分類方法

ここでは、会話のプロセスを分析するための分類方法について説明する。

(1) 発話の分類について

①分析単位の設定：まずはじめに、分析単位の抽出を行う。本研究では一方の話者が何らかの言葉を発し、会話を開始し、その後もう一方の話者の会話開始までの話した内容を『発話』とし、分析単位とする。このように話者交替が起こった際に区切られる『発話』を最小の分析単位として扱う。

②発話内容の分類：最小の分析単位として扱う『発話』をその内容によって分類する。内容分類は筒井（2012）を参考に、(a) 事実情動的自己語り (b) 自己言及的自己語り (c) 応答的自己語りの大きく3つのタイプの自己語りに分類する。また、「ああ」「ええと」など実質的な意味を伝達しておらず、特定の具体的な先行文脈を指すわけでもなく、相手の発話に対する応答や相槌として用いられていないものに関しては「フィルター」とする（佐藤，2005）。以下、各種の自己語りについて詳述する（Table 2）。

(a) 事実情動的自己語り：客観的な事実や情報についての語りであり、語り手の考えや行動など自己言及的な側面が含まれない語りである。例えば、ニュースやテレビ番組の内容の事実にのみを述べているものであり、その内容についての語り手の考えなどがつけ加えられていない語りである。

(b) 自己言及的自己語り：自分自身の過去の経験、未来の予定、ある事象に関する自身の考え、自身の性格に

Table 2
内容分類

| | |
|--------------|----------|
| a. 事実情動的自己語り | 1. 事実 |
| b. 自己言及的自己語り | 1. 経験 |
| | 2. 予定 |
| | 3. 習慣 |
| | 4. 思考 |
| | 5. 感覚・状態 |
| c. 応答的自己語り | 1. 相槌 |
| | 2. 同意 |
| | 3. 質問 |
| | 4. 評価 |
| | 5. 否定 |
| フィルター | フィルター |

ついで語りなど、自分自身に関する事象についての語りである。一般に自己語りとは語り手が自身の属性について語ったり、自分の過去の行動について語ることでありと捉えられる。下位分類としては、自身の過去に行ったことや体験したことについて語る【経験】、今後、未来に語り手が行う行動や、今後の予定について語る【予定】、現在、語り手が日常的に行っている行動や習慣となっている行動について語る【習慣】、ある事象についての自身の考えや感想について語る【思考】、感じたことや、感覚、その場の体調など様々な状態について語る【感覚・状態】の5つに分類する。

(c) 応答的自己語り：語り手が、問いかけや呼びかけに答えたり、質問を行うなどする語りを(c) 応答的自己語りと分類する。応答的自己語りに分類する語りでは、主にもう一方の語り手に呼応する形で行われることが多い。下位分類として、「うん」など相手の語りに対する短い言語反応であり、相手の調子に合わせて行う応答を【相槌】、【相槌】よりも明確に相手の意見に対して賛同する応答を【同意】、相手に対して、疑問や質問をなげかける【質問】、相手の語りに対して肯定的な評価を含む言葉かけをしているものを【評価】、相手の語りに対し否定的な言葉かけをしているものを【否定】と分類する。

③感情表現の有無について：『発話』において感情表現が含まれるか否を分類する。感情表現辞典（中村，1994）を参考に「つらい」「うれしい」などの感情動詞、感情形容詞を『発話』内を含むものを「感情表現有り」と分類する。また、「あーあって感じで」など擬音語+

「感じ」という表現を含む発話についても「感情表現有り」と分類する。

(2) 話題における分類

①話題の区切り方と定義について：それぞれの会話はこれらの『発話』の連なりで構成されているが、さらに『発話』の連なりを内容的なまとまりで区切ったものが『話題』である。筒井(2012)の5つの話題移行の基準(Table 3)に則り、『発話』の連なりを区切り、区切られた『発話』の連なりを『話題』として抽出した。また本研究では筒井(2012)の『話題』移行の基準に加えてTable 3の【2. すでに言及された対象や事象の異なる側面への言及】のうち発話数が5発話以下であり、後続の会話の内容が前の話題内容と同一であるとみなされた場合は話題が移行したとは見なさないこととする。

②話題の内容分類：①で抽出された『話題』の内容について、筒井(2012)を参考に分類する(Table 4)。「現場」の分類については、「現場に存在しない事物についての話題」と「現場に存在する事物の話題」の2種類に分類する。まず、大きく「現場に存在しない事物についての話題」とは、2者が会話しているその場には存在しないことについて言及している話題である。会話参加者の体験や考えていることなど、個人の体験を語っている話題や、会話参加者以外の第三者の経験や現状、また、ニュースで報道される事柄など一般的、抽象的な事柄などについての話題である。一方、「現場に存在する事物の話題」については、その場にいる会話参加者のどちらか、または両者の所有物や提供したものなど会話参加者

Table 3
話題移行の条件

| |
|----------------------------------------|
| 1. それまで話題となっていた対象や事態とは異なる、新しい対象や事態への言及 |
| 2. すでに言及された対象や事態の異なる側面への言及 |
| 3. すでに言及された対象や事態の異なる時間における様相への言及 |
| 4. すでに言及された対象や事態について、それと同種の対象や事態への言及 |
| 5. すでに言及された個別の対象や事態の一般化 |

Table 4
話題分類

| | | |
|----------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 現場に存在しない事物についての話題 | (1) 会話参加者に関する話題 (2) 第三者に関する話題 | 会話参加者の経験や現状、予定、習慣などの行動や、会話参加者の有する考えや感情 会話の現場にいない第三者の経験や現状、第三者の有する考えや感情、また一般的、抽象的な事柄など |
| 2. 現場の事物に関する話題 | (1) 相手に属するものについての話題 (2) 自分に関するものについての話題 (3) 相手にも自分にも属するものについての話題 (4) 相手にも自分にも属さないものについての話題 | 相手の所有物について、相手が出した飲み物や食べ物について 自分の所有物について、自分が出した食べ物について 共に見ている天候や景色、共に食べたりしているもの その場にある相手と自分以外のもの |

に属するものについての話題や、その場で会話参加者双方が見る、聞くなどができ、共有可能な事物(例：景色や天候)についての話題である。

(3) 分析手続き

①一致率の算出：上記の分類基準をもとに、コーパスデータを分類する。分類結果について臨床心理学を専攻する大学院生1名と協議の上、一致率を算出する。

②『話題』内の『発話』分類ごとの出現頻度：各会話において『話題』内にどの程度それぞれの発話内容がみられるかを明らかにするために発話内容(上位分類・下位分類)の出現頻度を話者ごとに算出する。

③「自己言及的自己語り」が頻出する箇所を抽出：『発話』分類において「自己言及的自己語り」の分類が連続する箇所と「自己言及的自己語り」の割合が高い『話題』を「自己言及的自己語り」が頻繁に行われていると仮定し、その特徴やプロセスについて分析を行う。本研究ではすべての語りを「自己語り」として見なしているが、今回は特に一般的意味合いで「自己語り」として捉えられている「自己言及的自己語り」に着目する。

IV. 結果

1. 分類方法の一致率

方法で述べた分類方法に則り、コーパスデータを分類し、一致率を算出した。その結果、『発話』分類は98%一致し、『話題』分類は78%一致した。『発話』『話題』分類ともに一致率が70%以上確保されているため、本研究の分類方法は妥当であると見なす。

2. 全会話の内容分類の割合

会話1~5の発話内容の分類基準に則り、『発話』の内容を分類し、その発話数と出現率を算出した(Table 5)。それぞれの会話には発話数や発話内容など偏りも見られたが、今回は平均を算出し、全体の傾向から分析を行った。総発話数は6335発話であり、会話の中で一番多く見られたのは大分類では「応答的自己語り」で45%、つ

Table 5
内容分類の合計発話数と出現頻度

| | | 合計発話数 | % |
|--------------|----------|-------|------|
| a. 事実情報の自己語り | 1. 事実 | 1222 | 19.3 |
| b. 自己言及的自己語り | 合計 | 1743 | 27.5 |
| | 1. 経験 | 606 | 9.6 |
| | 2. 予定 | 52 | 0.8 |
| | 3. 習慣 | 54 | 0.9 |
| | 4. 思考 | 987 | 15.6 |
| | 5. 感覚・状態 | 44 | 0.7 |
| c. 応答的自己語り | 合計 | 2859 | 45.1 |
| | 1. 相槌 | 2157 | 34.0 |
| | 2. 同意 | 156 | 2.5 |
| | 3. 質問 | 501 | 7.9 |
| | 4. 評価 | 34 | 0.5 |
| | 5. 否定 | 11 | 0.2 |
| フィラー | | 511 | 8.1 |
| 総計 | | 6335 | 100 |

Table 6
感情表現の出現数と頻度

| | 全体の総計 | % |
|--------|-------|------|
| 感情表現あり | 262 | 4.1 |
| 感情表現なし | 6073 | 95.9 |
| 総計 | 6335 | 100 |

いで「自己言及的自己語り」で27.5%見られた。このことから、全会話中のほぼ半数は「応答的自己語り」が行われていることが明らかとなった。また下位分類のレベルでは、【相槌】が全体の34%と一番多く見られた。それについて【事実情報の自己語り】は全体の19.3%、「自己言及的自己語り」の【思考】が全体の15.3%の割合で多く見られた。また下位分類の中で最も少なかった分類は「応答的自己語り」の【否定】が0.2%、【評価】が0.5%と少なく、次いで「自己言及的自己語り」の【感覚・状態】が0.7%と少なかった。友人との会話や雑談という枠組みの中では語りに対して肯定的であれ、否定的であれ、相手の語りに対して評価的な語りを返すことは少ないことが分かった。さらに、今回のデータでは自身の気持ちへの言及や、「きつい」「つかれた」など自身の感覚的な状態を語ることは少なく、むしろ「～と思っている」「～と考えている」などが多く語られていた。

3. 全会話の感情表現の割合

全会話資料1~5までの感情表現の割合をTable 6に示す。感情表現が含まれる箇所は4.1%だった。このことより、今回のデータにおいて「嬉しい」「悲しい」など直接的な言語表現により感情表現が現れる箇所は約4%程度であったことがわかる。

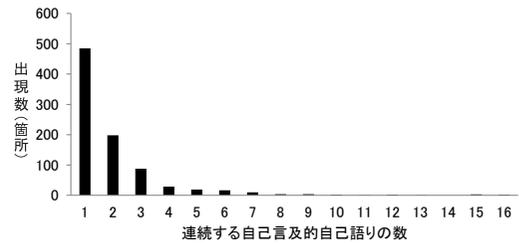


Fig.1 連続する自己言及的自己語りの数

4. 自己言及的自己語り発話が連続する箇所について

(1) 連続箇所について

一方の話者の語りの中で「自己言及的自己語り」発話の連続数の出現頻度のヒストグラムをFig.1に示す。ここからわかるように、本研究の分析対象である会話では、同一の語り手が「自己言及的自己語り」が連続せず、1発話で終了することが一番多く見られた。より高い頻度で見られる連続数は1回が485箇所、2回が198箇所、3回が88箇所見られた。それ以降、「自己言及的自己語り」の連続発話数が増加することに伴い、出現数が減少していく。このことから、本研究で対象としている日常会話においては、一方の「自己言及的自己語り」が連続することは少ないと言える。上記で述べたことを前提とし、ある一定程度「自己言及的自己語り」が連続している状態を日常会話の中で「自己語り」「自分についての言及」が長く続いていると仮定し、その箇所での発話内容の傾向や、感情表現の有無などの指標をもとに、どのようなやりとりが起きているかに着目することとした。そのため、本研究では連続発話の出現率が顕著に減少する部分を「自己言及的自己語り」が連続している箇所であると捉え、7発話以上「自己言及的自己語り」が連続する箇所に着目し、分析を行った。

(2) 『聞き手』話者の発話分類の割合

7発話以上「自己言及的自己語り」が連続する箇所において、「自己言及的自己語り」を行っている話者ではない一方の話者（以下、『聞き手』と呼ぶ）の発話分類の割合を算出した（Table 7, 連続部分）。また、「自己言及的自己語り」の連続部分の『聞き手』の発話内容の割合を算出した（Table 7, 非連続部分）。その結果、『聞き手』が行う発話としては「応答的自己語り」が79.7%と最も多かった。下位分類では【相槌】が最も多く、68.3%を占めていた。また、それに比べ、非連続部分の発話分類の割合では「応答的自己語り」が43.5%、下位分類の【相槌】は32.5%であった。このことより、「自己言及的自己語り」が連続して行われる箇所における、『聞き手』の発話分類は「応答的自己語り」が多く行われ、特に【相槌】が多いことが明らかとなった。

Table 7
bの連続部分と非連続部分の内容分類の出現頻度

| | | 全体の% | 連続部分 | 非連続部分 |
|--------------|----------|------|------|-------|
| a. 事実情動的自己語り | 1. 事実 | 19.3 | 0.1 | 20.2 |
| b. 自己言及的自己語り | 総計 | 27.5 | 7.9 | 28.4 |
| | 1. 経験 | 9.6 | 1.1 | 10.0 |
| | 2. 予定 | 0.8 | 0.0 | 0.9 |
| | 3. 習慣 | 0.9 | 0.4 | 0.9 |
| | 4. 思考 | 15.6 | 6.4 | 16.0 |
| c. 応答的自己語り | 5. 感覚・状態 | 0.7 | 0.0 | 0.7 |
| | 総計 | 45.1 | 79.7 | 43.5 |
| | 1. 相槌 | 34.0 | 68.3 | 32.5 |
| | 2. 同意 | 2.5 | 3.9 | 2.4 |
| | 3. 質問 | 7.9 | 6.0 | 8.0 |
| フィラー | 4. 評価 | 0.5 | 1.1 | 0.5 |
| | 5. 否定 | 0.2 | 0.4 | 0.2 |
| | 総計 | 8.1 | 12.1 | 7.9 |
| 総計 | | 100 | 100 | 100.0 |

Table 8
話題の終わり方

| | |
|------------|----------|
| 話し手自身による終了 | 24% (9) |
| 聞き手による終了 | 68% (26) |
| 会話の中断など | 8% (3) |

5. 自己言及的自己語り連続する箇所の終わり方について「自己言及的自己語り」が連続する箇所が含まれる『話題』の終わり方に着目した (Table 8)。その結果、対象となったデータは38話題である。分類については、李 (2000) のデータ中で個人情報保護や2者以上の会話になったため会話データ自体が中断しているものを「会話の中断」とした。さらに、相槌が重なりその話題が終了するものや、主に「自己言及的自己語り」を行っていた話者が別の話題を話すことで終了するものを「話し手自身による終了」と分類した。また、お互いの考えを言い合って終わる話題や『聞き手』が自身の「自己言及的自己語り」を行い始めて話題が変わるもの、『聞き手』がもう一方の「自己言及的自己語り」に反する語りを言い話題が変わるものを「聞き手による終了」と命名し、分類を行った。

対象となった38話題のうち9話題 (24%) が「話し手自身による終了」、26話題 (68%) が「聞き手による終了」、3話題 (8%) が「会話の中断」と分けられた。「自己言及的自己語り」が連続する箇所が含まれる話題では、68%は聞き手となっている側が会話を終わらせる要因になっていることが明らかとなった。

6. 自己言及的自己語りがあられやすい話題について
本節では、全般的に「自己言及的自己語り」が多い話題の特徴を掴むために、「自己言及的自己語り」が連続する箇所が含まれている話題に加え、各会話において

Table 9
話題の出現頻度

| | 現場の事物に関する話題 | 現場に存在しない事物に関する話題 |
|---------------|-------------|------------------|
| 全体 | 94% | 6% |
| 「自己言及的自己語り」高群 | 91% | 9% |
| 「自己言及的自己語り」低群 | 94% | 6% |

Table 10
1話題における平均発話数

| | 現場の事物に関する話題 | 現場に存在しない事物に関する話題 |
|-------|-------------|------------------|
| 平均発話数 | 7.9発話 | 13.4発話 |

「自己言及的自己語り」の出現頻度上位10話題を「自己言及的自己語り」がより多く行われている話題と仮定し、分析を行った (Table 9)。前述した「自己言及的自己語り」が連続する箇所が含まれている話題と各会話の「自己言及的自己語り」の出現頻度上位10話題を「自己言及的自己語り」高群、それ以外の話題を「自己言及的自己語り」低群とした。

全会話資料の話題分類の94%は「現場に存在しない事物に関する話題」であり、「現場に存在する事物の話題」は全体の6%とわずかだった。一方で今回対象とした「自己言及的自己語り」高群は「現場に存在しない事物に関する話題」は91%、「現場に存在する事物の話題」は9%と、「現場に存在する事物の話題」の割合が増加していた。

7. 一つ分の話題の平均発話数

「現場に存在しない事物の話題」と「現場に存在する

事物の話題>の1話題における平均発話数を比較した (Table 10)。その結果、<現場に存在しない事物の話題>のひとつの話題あたりの平均発話数は13.4発話、<現場に存在する事物の話題>では7.9発話であった。1話題の平均発話数は<現場に存在する事物の話題>が<現場に存在しない事物の話題>に比べ少ない傾向があった。<現場に存在する事物の話題>では、話題が続きにくく短いやりとりで終わりやすいと言える。

V. 考 察

1. 自己語りを聴く聞き手の応答について

(1) 日常会話における聞き手の応答について

本研究の結果より、「自己言及的自己語り」が比較的長く続いている語りにおいては聞き手が「相槌」を繰り返していることが仮説として考えられた。もともと「日常会話」「雑談」について岡田・石井・Altman (1997)では、雑談の性質について『「同一の感情で共有できること」を確認しあう、あるいはお互いの『身体』の同一性を確認し合う行為である」という指摘がなされている。雑談について、藤本ら (2003)では雑談と討論を比較し、雑談の特徴について「インフォーマルな性格が強く、その内容も自己に関することや会話者の興味・関心などといった、より広範な話題が展開される」と述べられており、「相手とテンポよくそして頻繁に発話のやりとりを繰り返す」という特徴が指摘されている。さらに、熊谷・木谷 (2010)では、雑談における会話参加者の役割に関する特徴として、「役割が特に固定していない」という指摘がされている。様々な研究の中で日常会話や雑談の特徴として、役割を固定せず、話題の内容が自由であること、話者が相互に平等に語りを行うという点があげられる。このような日常会話や雑談の特徴を考えると、会話の中でも様々な話題が様々なモードで行われているということが推察される。

今回対象とした、自己言及的自己語り連続する箇所は日常会話では頻度が少なかった。頻度は少ないものの、そのやりとりの様相をみると、自己言及的自己語り連続する箇所では聞き手が「相槌」を繰り返していることがデータより明らかになっている。そのため、一見自由にお互いが話している日常会話という枠組みの中でも「話し手」「聞き手」が分かれるモードがあることが明らかとなった。一方で、その頻度は少ない上に、今回対象としたデータでは自己言及的自己語りが比較的長く続いている箇所でもその話題の終わり方に着目すると、そのほとんどが聞き手が自分の意見を語ったり、アドバイスをするなどして、聞き手側の要因で話題が終わるのがほとんどだった。前述したように、「ただ聴く」ということは非常に特殊なことであり、日常会話では比較

的長く、自己のある側面について語る部分であっても語り手が自分の話が尽きるまで語るということは少ないのではないだろうか。

(2) 臨床心理対話への接続

桑原 (2010) は日常的な対話とカウンセリング対話を比較しながら、「聴く」という行為についてただ聴く「だけ」でも、人のころには変化が生じるということを書いている。また、聴くだけに徹する人は多くなく、たいていは相手の気持ちを軽くしようと「アドバイス」するなどして、聴く「だけ」ではなくなることを指摘し、聞き手の側が聴いていることにしんどくなって、その「重荷」を下ろそうとする動機が働いているのではないかと指摘している (桑原, 2010)。河合 (1992) も「たいてい人は、聴く『だけ』ということはずなくして、なにか言う。だから僕たちのやっている、ただ『聴く』ということに意味がある」と述べ、「ただ聴き続ける」ということの特別さについて述べている。また、長岡・吉岡 (2012) は高校教師の悩み相談場面とカウンセリング対話のロールプレイを対比し、どのように話の聴き方が異なるのかということの研究している。その結果、カウンセリング対話の特徴として相談者の発話と沈黙が高校教師の悩み相談場面と比べ長いことが明らかとなった。このように、カウンセリング場面では聞き手であるカウンセラーは相談者が沈黙した際に、すぐにアドバイスや答えを与えるわけではなく、相談者自身による思考の進展や深まりをじっと待つということを示唆している。今回の分析からは長岡・吉岡 (2012) の研究のように語り手となっている話者が沈黙し、再び語りを紡ぎだすという場面は見られなかった。日常会話においては、一方の語り手の思考の深まりを待つということや、会話を行っている中に長い沈黙を共有するという場面は少ないと考えられる。つまり、日常会話ではじっくりと自分の側面や過去について内省し、ともに味わう、共有するというモードは起こることが少ないと考えられた。しかし、日常会話や雑談という枠組みの中で自分の話をし続けるということは意義がみられる面もある一方で、支障がある場面もあると考えられる。例えば、相手の立場や状況を考えず語り続けてしまい、その場の2者のやりとりに齟齬が生じたりする場合や、語りすぎてしまうことで、自分を晒しすぎてしまった後悔や恥ずかしさを感じることもあるかもしれない。そのため、必ずしも日常での自由度が高い場面で自分の話を語り続けることが意義があることは限らないのではないだろうか。

2. 対象を通して自己を語ること

(1) 日常会話の中で「自己」「他者」以外について語る

<現場の事物に関する話題>は2者が話している場に

存在するもの、例えば2人で食べている食べ物、その場の天気などについて言及しているものである。本研究ではその場のものについての語りに関して「自己言及的自己語り」が多い傾向にあると考えられた。その場の語りではその話題内に「自己言及的自己語り」の割合が高くなる傾向はあるものの、話題の長さ自体はそれ以外の話題と比べると短くなり、持続することはまれである。また、「その場の語り」は先ほどの一方の「自己言及的自己語り」が連続する語りとは違い、聞き手と語り手が分かれず、互いに「自己言及的自己語り」を行っていた。さらに、内容分類の割合の違いに着目すると、「その場の語り」の方がその他の話題における語りと比べ【感覚】【思考】が多く見られ、その瞬間の自分の状態や感覚について言及されやすいことが考えられる。「その場にあるものの語り」は自身の実際の体験について語るわけではない。自身の体験などを語るわけではなく、ふとした瞬間にその場に目についたものへの語り手の率直な語りが生み出されるのではないかと考えられる。そのため、語り手が「自分をこう語りたい」ということや「こう見せたい」という意図的な語りではない、作りこまれていない自然な語りが見られるのではないかと考えられる。一方で、本研究では「現場の事物に関する話題」は他の話題に比べ、1話題分の発話数は少なく、語りが継続しているとは言いがたい。語りが継続しない要因として、この話題に関しては語り手、聞き手がわかれていないことが挙げられるのではないかと考えられる。その場のものについての語りは日常会話においては聞き手、語り手の役割が分かれることは稀であり、双方が語り手となり語りやすい。お互いがお互いの意見を話し、受け取る側の不在が起りやすいのではないだろうか。そのために日常会話では「現場の事物に関する話題」、いわゆるその場にあるものに関する話題は持続しにくいのではないかと考えられる。

(2) 臨床心理対話での三項関係

本研究で見られた自分自身ではないものということを通じて、自分自身を語るという事象は「三項関係」を成立させる自己と他者以外の「第三項」のはたらきと類似していると考えられる。三項関係とは、第一項は「私」、第二項は「あなた」、そして第三項は「物だけでなく、出来事や物語の中に登場する人物、つまり彼や彼女」いわゆる「対象」をさし、この私・あなた・対象が構成する関係のことを言う(熊谷2006, やまだ1987, 2001)。言葉が十分に発達していない子どもや、成人においても自身の問題を直接言葉で語ることが難しい場合などにおいて、箱庭やMSSM (Mutual Scribble Story Making) が第三項的な役割を担い、心理療法の進展に大きな役割を担っていることなどが指摘されており、三項関係の成

立、第三項の重要性が指摘されている(増澤, 2008)。さらに、前述したような描画など非言語媒体を介在することによる三項関係の成立が、言語表現を促す(語りを生み出す)と言われている(熊谷, 2006)。このように「私」と「あなた」以外の「第三のもの」が間に入ることにより、語りを生み出しやすい状況が生まれるのではないかと考えられる。日常会話の中でも直接的に自己を語るわけではなくとも、第三項にまつわる語り手の語りのなかで、語り手自身のイメージが映しだされたり、無意識に自身の重要な語りや、その語り手独自の語りや紡ぎだされることがあるのではないだろうか。

VI. 今後の課題

本研究では日常会話での自己語りの様相がどのようなものであるかについて一定の知見が得られた。今後本研究の語りとの比較を行うことで、心理療法場面での語りの独自性を明らかにしていくこととしたい。

今後の課題としては以下の二点が上げられる。(1) 日常場面のデータにおいて、今回着目した自己言及的自己語り以外の点にも着目して分析を行う(2) 臨床場面のデータとの比較の二点が今後の課題である。

〈付記〉

本論文を作成するにあたりご指導・ご助言いただきました、九州大学大学院人間環境学府教授の福留留美先生、吉良安之先生に心より感謝申し上げます。

引用文献

- Bruner, J. S. (1999). 意味の復権 (岡本夏木ほか, 訳). 京都: ミネルヴァ書房 (Bruner, J. S. (1990) *Acts of meaning*. Cambridge: Harvard University Press. London.)
- カール・ロジャーズ (2007) ロジャーズのカウンセリング (個人セラピーの実際) 梶背稔 [監修] 加藤久子・東口千津子 (共訳)
- 遠藤利彦 (2002). 語りにおける自己と他者とそして時間: アダルトアタッチメント・インタビューから逆照射して見る心理学における語りの特徴 心理学評論 **49**, 470-491
- 榎本博明 (2008). 語りを素材に自己をとらえる 名城大学人文紀要 第3巻, 3号
- 元智大学ワークショップ「談話コーパスの構築とその利用」(2007) 語料庫
<<http://fl.hs.yzu.edu.tw/LSP/others1.html>>
- 廣瀬幸生・長谷川葉子 (2010). 『日本語から見た日本人—主体性の言語学』開拓社
- 久野 瞳 (1978). 「談話の文法」大修館書店

- 河合隼雄 (1992). 心理療法序説 岩波書店
- 河崎俊博・池見 陽 (2014). 非指示的心理療法の時代に観られる Carl Rogers の Reflection という応答 臨床心理学専門職大学院 紀要 第4号, 21-30
- 加藤 澄 (2009). サイコセラピー面接テキスト分析 サリヴァンの面接トランスクリプトに基づいて ひつじ書房
- 熊谷高幸 (2006). 自閉症-私とあなたが成り立つまで ミネルヴァ書房
- 熊谷智子・木谷直之 (2010). 三者面接調査におけるコミュニケーション: 相互行為と参加の枠組み くろしお出版
- 桑原知子 (2010). カウンセリングで何がおこっているのか 動詞でひもとく心理臨床 日本評論社
- 増澤菜生 (2008). 非言語療法に関する研究—ナラティブを生み出す三項関係と MSSM— 現代社会文化研究 No.41 p.45-62
- 松本 学 (2009). 口唇裂口蓋裂者の自己の意味づけの特徴 発達心理学研究 第20巻, 第3号, 234-242
- 中村 明 (1994) 感情表現辞典 東京堂出版
- 長岡千賀・小森政嗣・桑原知子・吉川左紀子・大山泰宏・渡部 幹・畑中千紘 (2011). 心理臨床初回面接の進行—非言語行動と発話の臨床的意味の分析を通した予備研究— 社会言語科学 第14巻第1号 pp188-19
- 長岡千賀・吉川左紀子 (2012). カウンセリング対話における「聴き方」 子安増生・杉本 均 (編著) 幸福感を紡ぐ人間関係と教育 ナカニシヤ出版 pp100-116
- 野村晴夫 (2005). 構造的ー貫性に着目したナラティブ分析: 高齢者の人生転機の語りに基づく方法論的検討 発達心理学研究 第16巻 第2号 109-121
- 野村晴夫 (2008). 自己を語ることと想起すること—心理療法場面を手掛かりとしたその機能連関の探索— 心理学評論 第51巻 第1号 99-113
- 岡田美智男・鈴木紀子・石井和夫・Altman, Edward (1997). 雑談の構造的な理解に向けて 情報処理学会研究報告. SLP, 音声言語情報処理 97巻66号 39-44
- 李 麗燕 (2000). 日本語研究叢書12 日本語母語話者の雑談における「物語」の研究—会話管理の観点から— くろしお出版
- 斉藤清二 (2013). 事例研究というパラダイム 岩崎学術出版社
- 佐藤有希子 (2005). 日本語母語話者の雑談における「うん」と「そう」—フィルターとして用いられる場合— 「国際開発研究フォーラム」 29
- 筒井佐代 (2012). 雑談の構造分析 くろしお出版
- 鳥越淳一 (2014). 質問介入の治療的多重性の考察 日本橋学館大学紀要 第13号
- やまだようこ (1987). ことばの前のことば ことばが生まれるすじみち1 新曜社
- やまだようこ (2001). 乳幼児の三項関係と描画の共同生成 臨床描画研究 16 69-97
- 山口智子 (2002). 人生の語りにおける語りの変容について 高齢者の回想に関する基礎的研究 心理臨床学研究第20巻, 第3号 p275-286
- 山本眞利子 (2007). 依存的な女子学生への自己解決志向型発達カウンセリングアプローチの試み 心理臨床学研究第25巻, 第5号 p572-581
- 山下親子 (2009). 憤怒と抑うつ感に苦しむ男性の変容過程—クライアントとセラピストの関係性のなかで— 心理臨床学研究第26巻, 第6号 p675-686